

# 鶴見崎の砲台

案 浦 照 彦

(賛助会員・福岡県春日市)

## 前言

南海部郡鶴見町の鶴見崎に終戦まで俗に「鶴見崎砲台」と呼称された軍事施設が設置され、昭和十七年（一九四二）一月十一日、試射中爆発する大事故等、巷間に伝えられている。

今日、強者どもの夢の跡として遺跡が残っているが、曾ては軍機密、戦後は軍忌避の風潮から正鵠こたを期していない点が多い。

偶然、鶴見町役場、神田音繁氏より正確な歴史事実を知りたいとの依頼があり、改めて調査した結果、纏まりを得たので史談に掲載を依頼し御参考に供したいと思うものである。

資料の主体は国会図書館蔵の曾ての陸軍極秘文書、「現

代本邦築城史、第二部第十六卷、豊予要塞築城史」によった。

その他の参考図書は末尾に紹介する。

## 本文

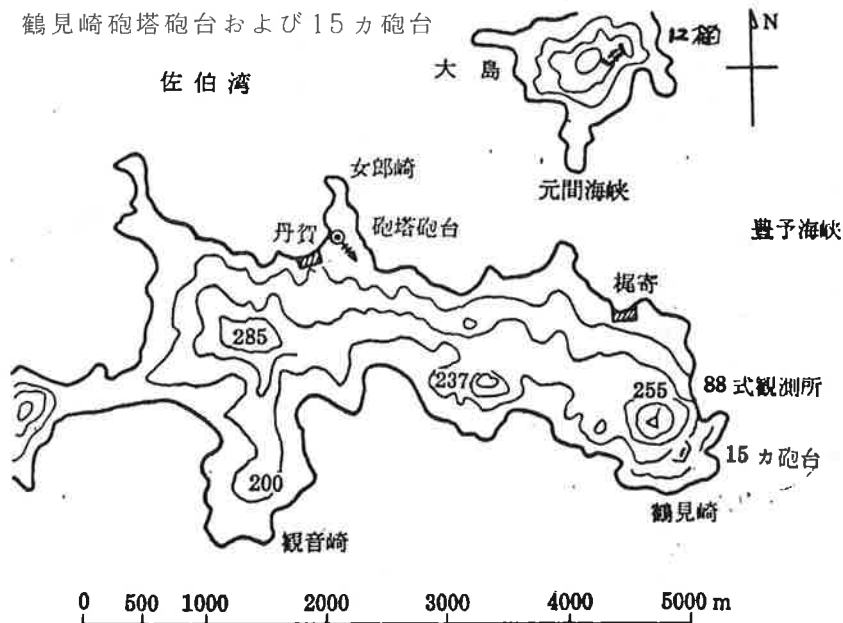
### 一、砲塔四十五口径三十センチ加農砲台

#### (一)設置目的と経緯

海に囲繞されている日本は明治期から終戦までの間、敵艦船からの攻撃に対する防衛のため重要地域に砲台や堡壘を築いて「〇〇要塞地帯」と名称していた。

瀬戸内海の西南口、豊後水道（別称豊予海峡）の防衛のため大正八年（一九一九）五月佐賀関―高島―佐田岬の線に防備砲台を築城することに決定した。

鶴見崎砲塔砲台および15カ砲台



翌九年八月「築城部豊予支部」が佐賀関に設置され十年七月高島第二砲台起工を初めに佐田岬第一、第二砲台と次々に起工されていった。

大正十二年（一九二三）二月二日、艦船の砲威力の進歩と共に「要塞再整理要領」の裁可が下った。

「豊予要塞築城史」によると

豊予海峡ハ其ノ幅員比較的廣ク敵艦船航通ノ杜絶ヲ期スルコト困難ナリ、故ニ其ノ第一線ヲ鶴見崎、水ノ子島、日振島ノ線ニ前進シテ防御線ヲ重畳セシム。然ルトキハ海軍防衛施設ト協力シ得ルノミナラズ、陸海軍作戦ノ為、重要ナル佐伯湾モ掩護シ得ルノ利ヲ併有シ得ベシ

と記していることから、豊後水道の入口付近に位置する地理的環境の鶴見崎から縦深梯次に佐田岬ノ佐賀関の最終防衛線砲台までの間に四国・九州に砲台を控置して迎撃する構想であったことが伺える。

ここに鶴見崎が軍事的に重視され砲台が築城されることになったのである。

この再整理要領が決定される二年前の大正十年ワシントン条約の海軍軍縮によって米・英・日の軍艦保有率は

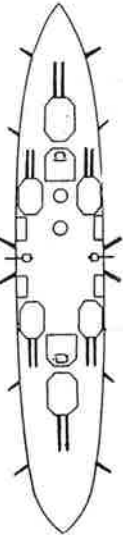
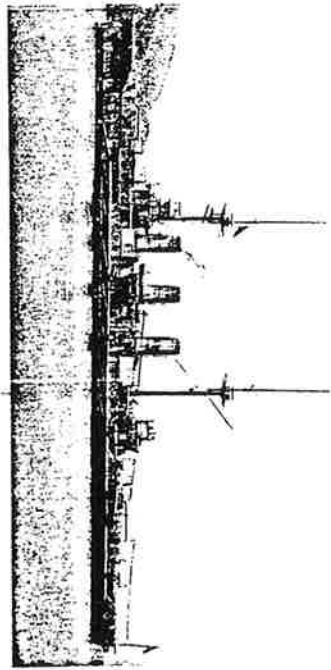
# 伊 吹 (いぶき)

艦 種 一等巡洋艦 二級(信濃川)  
 機房と砲塔艦なり。

山名に因る伊吹山は近江吹上りの兩所に防  
 る標高 4,545 尺。

艦 名 考 明治 40 年 5 月 22 日起工、同 42 年 11 月 1 日竣工。本艦は起工より僅かに 6 ヶ月に  
 して進水し、更に其後 2 ヶ年にして竣工。全  
 工程 2 ヶ年半にして完成。故の程大艦とし  
 ては記録的のものなり。

大正元年 8 月巡洋艦艦に列す。同 5 年 9 月乃至  
 9 年横濱(山縣)に在軍。同 5 年 8 月特別南  
 遣支隊に属し印度洋澳洲方面管船に在じ  
 旅洲新回航軍隊輸送援護を行ふ。海軍少将  
 艦にエムデンの追跡時代に關係あり。艦長大  
 佐加藤元治。同 7 年 12 月第三艦隊に属  
 し。艦長沼津警備艦長大佐佐原重一。同  
 12 年 9 月 20 日除籍。海軍省海軍部  
 制假裝初に出る。



— 要 目 —

速 度	48.5 呎	兵 隊	12 時 4
吃 水	7.5 呎		8 時 8
機 力	26 呎		4.7 時 14
機 種	14,600 噸		12 時 8
機 材	カーチス式タービン 2 基		機 庫 4
機 材	24,000		機 材 倉 庫 3
機 材	22		機 材 倉 庫 4
機 材	817		機 材 倉 庫 5
機 材	鋼		機 材 倉 庫 6
機 材			機 材 倉 庫 7
機 材			機 材 倉 庫 8
機 材			機 材 倉 庫 9
機 材			機 材 倉 庫 10
機 材			機 材 倉 庫 11
機 材			機 材 倉 庫 12
機 材			機 材 倉 庫 13
機 材			機 材 倉 庫 14
機 材			機 材 倉 庫 15
機 材			機 材 倉 庫 16
機 材			機 材 倉 庫 17
機 材			機 材 倉 庫 18
機 材			機 材 倉 庫 19
機 材			機 材 倉 庫 20
機 材			機 材 倉 庫 21
機 材			機 材 倉 庫 22
機 材			機 材 倉 庫 23
機 材			機 材 倉 庫 24
機 材			機 材 倉 庫 25
機 材			機 材 倉 庫 26
機 材			機 材 倉 庫 27
機 材			機 材 倉 庫 28
機 材			機 材 倉 庫 29
機 材			機 材 倉 庫 30

五・五・三の比率に決定された。

当時の日本海軍は俗に「八・八艦隊」と称した軍拡を計画し鋭意邁進していたのであったが、この軍縮条約のために建造中の戦艦、巡洋艦及び旧艦を廃艦もしくは空母、標的艦等に転用せざるを得なかったのである。

軍縮のため、日本本土前地の海上において来襲の敵艦を撃滅するの戦力削減を危懼し、ここに廢艦等の主砲を陸上砲台に保管轉換する案が呈上されるに至った。

大正十五年（一九二六）八月陸軍大臣より鶴見崎砲台の工事実施が下命された。

この時、八月一日には「豊予要塞司令部」が佐賀関に発足し、名実ともに豊予要塞地帯の指揮組織が確立され、鶴見崎砲台も当然、その指揮下に包含されることとなった。

(一) 設置

昭和二年（一九二七）四月、豊予築城支部が佐伯に進出し、六月十六日から現鶴見町女郎崎脚下の丹賀浦北方標高五〇メートルの台地に先づ砲塔井（遺跡コンクリート穴）及び付属施設の工事から着工されたのである。

昭和五年（一九三〇）七月、砲塔四十五口径三十三センチ

チ加農（旧伊吹艦後部砲塔）の秘密設計図が豊予要塞司令部と陸軍兵器本廠長に送付（別紙一）（二）（三）（四）されて四一式四五口径三〇センチカノン二連装砲の備砲工事が開始された。

○砲の概要諸元

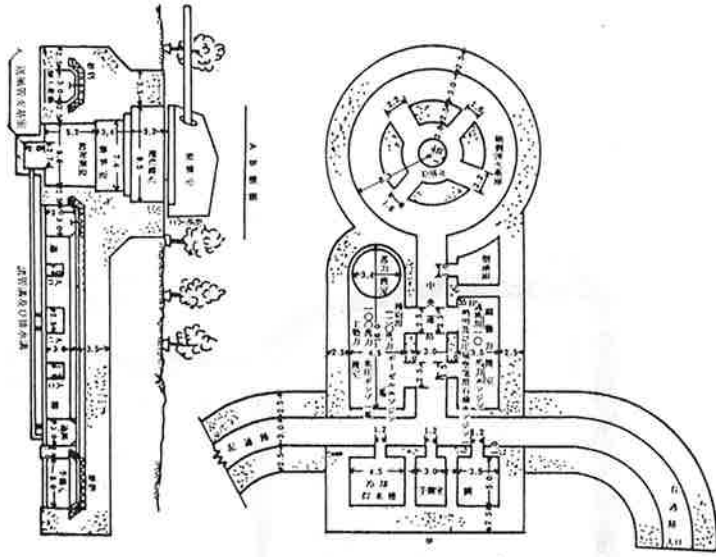
口徑	三〇、四八センチ
閉鎖機様式	四一式
砲身長	一四、一八一メートル
重量	六〇、三二四キログラム
射界	左右、一三五度
高界	高、三五度、低、一度
射距離	二六八〇〇メートル

※砲兵沿革史第三卷 保転砲塔諸元表

備砲は大正十二年（一九二三）九月二十日付で老朽艦として廢艦となった鞍馬型一等巡洋艦（後の重巡）の後部四一式四五口径三十三センチ二連装砲塔であり、当時の技術では難工事とされていた。

工事主任官は陸軍工兵大尉久保禎三（陸士二八期）、

30センチ砲塔砲台内部配置図



大尉は終戦時、中将第四野戦鉄道司令官（漢口）で迎えた。（陸軍工兵史）

備砲担当主任官は砲兵中佐奥野由郎とされている。

（砲兵沿革史第三巻）

昭和六年（一九三一）九月、工事は竣工。公称「鶴見崎三十センチ砲塔砲台」、通称「丹賀砲台」と呼び、豊予要塞司令部と同時に発足した豊予要塞重砲兵連隊の第一中隊が配属された。

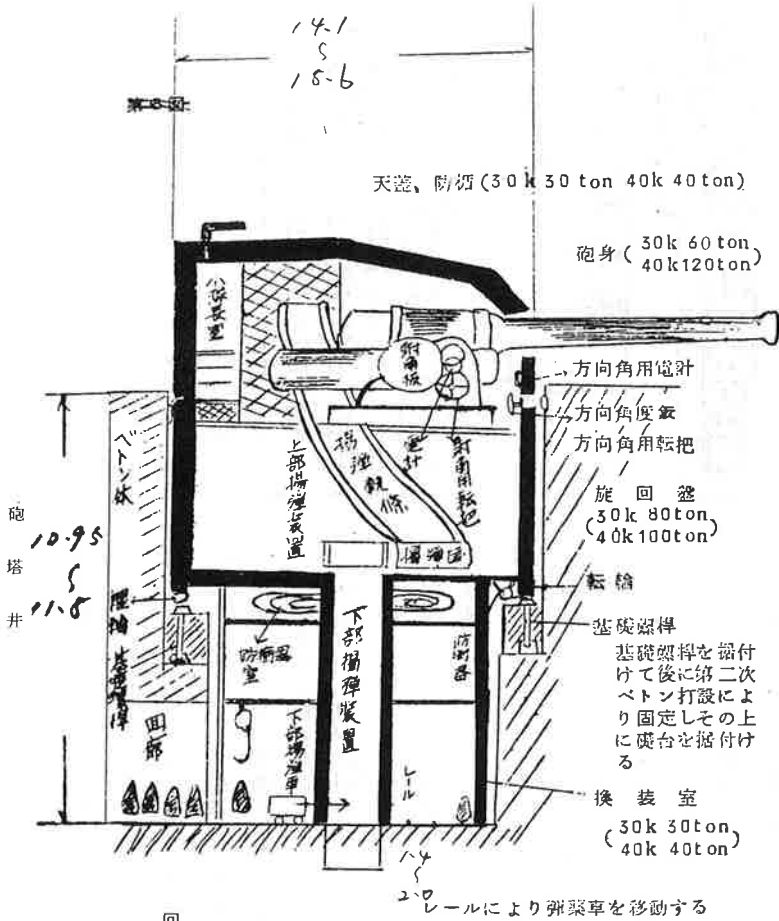
砲台の主射線はSE六〇度であり、鶴見崎の背陵山脈のために射撃不能な死角が存在したが豊後水道主航路の射撃は可能であり、砲台の東方向、大島、元ノ間海峡も十分射撃可能であったという。

鶴見崎砲台の新設に関連し、高島第一、第三、日振島第一、第二、大島等の諸砲台の築城は中止となったのである。

また、「八八式海岸射撃員観測所」等の補助施設も完成したのは翌七年九月であった。

鶴見崎砲塔砲台の原図は不明である。参考のため「洲崎第一砲台」の内部配置図を掲示しておく、概略、同じである。（資料、日本築城史）

# 砲塔内部構造概要図



回籠に弾薬二〇〇発収容

チェーンブロックにより弾丸を下部揚弾車につむ

砲兵沿革史第5巻  
元陸軍大佐 草野二郎回想記

### (三) 砲腔爆發大事故

昭和十六年（一九四一）に入り対英米關係が緊迫し同年十一月十七日、豊予要塞に緊急戦備が発令され、十二月二十日豊予要塞司令部、同重砲兵連隊並に陸軍病院の戦時編成が十二月二十七日付で下令された。

緊急配備に基き要塞重砲兵連隊は昭和十七年一月十一日、鶴見崎砲台の実弾試射を実施することになった。

これが鶴見砲台の生命を絶つに至ったが、その状況を豊予要塞築城史によると

#### (一) 発射弾 左右両砲各四発

被帽型通常弾

炸薬、黄色薬

#### (二) 射距離、最初四発は一〇〇〇メートル、後ノ四発

ハ二〇〇〇メートル。

#### (三) 破裂状況

左砲ヨリ交互ニ一発宛発射シ、最後ノ一発トナリ

テ右砲発射ノ際、弾丸砲腔内砲身部付近ニテ破裂ス

#### (四) 損害

砲室内ニアリシ連隊長以下十六名即死弾薬室及び其ノ下方ニ居リシ二十八名重傷マタハ輕傷、右砲身

ハ砲口ヨリ約九メートル二〇センチノ部位（砲耳部）

折断シ、前半部砲身ハ前方約十五メートルニ放擲セラル。右砲身ハ一見故障ナキが如キモ駐退復座機ハ

機能喪失ス。

掩蓋、駐退復座機、高低方向照準機ハ全部破損。

#### (四) 原因

断定シ得ズ

#### 二、十五センチ加農砲台

昭和十七年に入って米軍反攻が予想される状況、特に潜水艦攻撃が予想される時点において豊予要塞の主力砲台の使用不能は憂慮すべき事態となつたため、応急措置的に日振島、沖ノ島、芹崎等（丸太島）に野砲第一、第二砲台を築城、三月から鶴見崎の突端、現鶴見崎灯台背面の山頂に「七年式十五センチ加農砲」四門砲座砲台を起工して、

九月七日に竣工、「鶴見崎第一砲台」と命名された。

この砲台は空襲の激化と戦局の不利から鶴見崎灯台の北側崖に洞窟砲座化して、その陣地も砲台の名を付すような堅固なものでなく、三六〇度射界の利点も喪失していたのである。

このほか鶴見崎の北方約一・五キロ、元ノ間海峡を隔てた大島の標高一九三・三メートル高地東方麓に三八式十二センチ榴弾砲四門を据砲していた。

これらの砲は一発も射つことなく終戦を迎えて破壊撤去されてしまった。

七年式十五センチ加農砲諸元

口径	一四・九一センチ
砲身長	七・五一メートル
重量	六・五一九キログラム
閉鎖機	螺式
砲架	固定
射界	三六〇度
高低射界	高三〇度、低八度
射距離	二〇二〇〇メートル

(砲兵沿革史第三卷三十頁より)

三、八八式海岸射撃員観測所

砲台ではないが、付属施設として欠くべからざるもの

として「八八式海岸射撃員観測所」がある。

鶴見崎の突端、現「鶴見崎灯台」の位置に遺跡があるが、全貌は不明となっている。

技術本部長、陸軍中将多田礼吉が大尉時代に発明した射撃員で紀元二五八八年(一九二八)、昭和三年正式に採用され各砲台に配置された。

。観測所は地下鉄筋コンクリート造り

算定具、観測、司令、通信、計算等の各室から構成されていた。

。主要装備機器

測遠機、算定具、計器(配電)盤

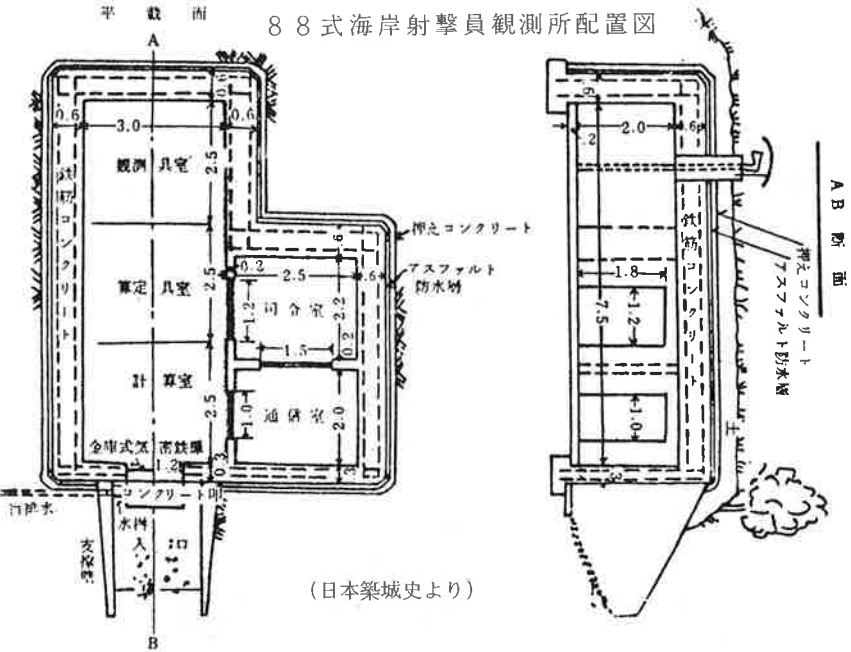
。射撃要領

潜水艦の潜望鏡の形をした測遠機で、目標の方向、速度等の観測した情報を計器盤、算定具を経て算定手が電流計の指針を合せ、同時に砲側の方向角、射角の照準手が各々電流計の指針を転把を動作することによって合わす。

合えば砲は目標物に対し正確に射撃できる画期的な射撃員であった。



88式海岸射撃員観測所配置図



(日本築城史より)

結言

昭和二年六月に着工から終戦までの間、十八年と二ヶ月、鶴見崎は要塞地帯として軍事一色に築まったと言える。戦後約四十年、当時は軍機密事項として知る人も少く、また状況を知る人も年々亡くなり今日での誤伝もさることながら、風化の一路をたどっていることは事実である。今にして残さざればと思ひ、悪文粗筆を顧みることなく記述したい。

砲台の価値及び戦績の批判はともかく、約二十年間、鶴見崎に一の歴史を作っていたことには相違ない。

特に当時の人々が直接攻撃してくる敵艦船から防衛することに真剣であったことは、砲塔砲台の総工費が六万七千八百二十円三拾銭、当時約三〇坪の家が八百円で建築できたことを思うと、いかに莫大な経費を要したか想像できる。(砲を除いて現在で十五億円)

ちなみに観測所は約五千六百六十円である。

。 参考資料

- |     |              |       |        |
|-----|--------------|-------|--------|
| (1) | 日本築城史        | 浄法寺朝美 | 原書房    |
| (2) | 砲兵沿革史(三・五卷)  |       | 偕行社    |
| (3) | 兵旅の賦(明治・大正篇) | 案浦照彦  | 西日本新聞社 |
| (4) | 豊予要塞築城史      | 陸軍省   |        |



陸軍省 第四三六號

秘甲第 二四號

砲塔四十五口径三十新加農 (舊伊吹) 後面送付ノ件通

昭和五年七月十七日

陸軍技術本部副官 八木 餘

陸軍省副官 松浦 淳 六郎 殿

兵器本廠並豐豫要寮司令部へ配賦豫定ノ首題砲塔圖面左記ノ通送付ス  
注、大正末期に歩兵第1旅団長(小倉) 兼、アノ、竹園長(昭和三十二年六月編成)

左記

一、作用圖以下別細目録其一ノ通

火砲班出圖八八「六一五」各二部

二、基礎排水管以下別細目録其二ノ通

火砲班出圖八六「六一四四八」各二部

三、ローラーパス用ホルト以下別細目録其三ノ通

火砲班出圖八七「六一七五」各二部

四、七十五馬力重油發動機以下別細目録其四ノ通

